

# 風を知る

(ヨットにのつて)

## 谷直樹

「子どもは風の子」というが、子どもは大人より風に敏感かもしれない。趣味でセーリングスクール

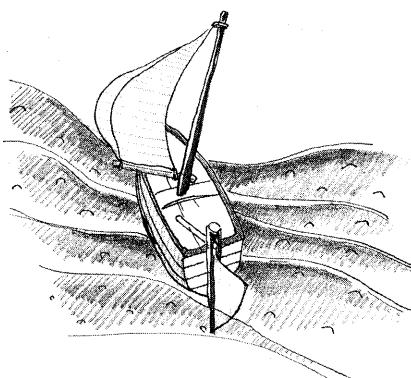
をしていると、よくこう思うときがある。子どもはその小さい身体にいつもいっぱいの風を受けているのが好きだからだろう。試しに子どものまねをしてみよう。

腕を飛行機の翼のようにひろげて走ってみると、風の中を飛んでいる感覚を味わえる。雨傘にわざと強い風を入れて、あおられてみる。くまのブーさん

に出てくるコブタのように小さな身体が空に舞い上がりそうになる。それともメリーゴーピンズかな。

アーサーランサムの不朽の名作「ツバメ号とアマゾン号」には、ヨットで冒険をする子どもたちが出ててくる。

第二巻の冒頭ではツバメ号が沈没してしまう。原因は強い追い風の中で進路をたもてなくなつて、子どもたちがカマス岩と名付けた鋭く立った岩に激突したためであつた。



当時、湖上には風速一〇メートル近い風が吹いていた。湖面は白波が立つており、小型ヨット（ディンギー）がぎりぎり帆走可能な状況であった。ツバメ号には最近のディンギーには滅多に見られなくなつた縮帆機能がついていた。が、艇長のジョンは、スピードが落ちるのを嫌つて縮帆せずに出航してしまつた。

ヤマネコ島から馬蹄湾へは方位南西の方向だから、北東の追い風なら一直線だ。フルセール（総帆展開）で行けば、風が強くなる前に馬蹄湾に逃げ込める。そうジョン少年が判断したのも無理はない。

飛ぶように快走してきたツバメ号はしかし、風軸を超えて帆桁（ブーム）を出す格好になつた。セル

ル（帆）は突然裏帆を打ち、帆桁が反対舷にうなりをあげて一気にまわつてしまつた。ヨット用語でいうワイルドジャイブである。バイキング船のように帆を横に張る帆船と違つて、ヨットは帆を縦に張る。そのため追い風の時に

は帆桁を左舷か右舷のどちらかの真横に一杯に出しことなる。最も不安定な姿勢である。

風が真後ろ（風軸という）なら問題はないが、風軸を境に帆の出し方はかえなければならない。右斜め後ろから風を受けるときは左舷に、左斜め後ろから風を受けるときは右舷に、という具合である。この帆桁回転の操作がジャイブである。

少々専門的になつてしまふが、ジャイブが危険なのは、長い帆桁が帆柱（マスト）を中心に一八〇度回転するときに非常に大きなモーメントが起きたからだ。通常のジャイブではこのモーメントを軽減させるために、帆綱（シート）をゆっくり手繰つていき、また徐々に出していくようにする。

ツバメ号はヤマネコ島からずつと左舷に帆桁を出して、後から考えると馬蹄湾に向かつて左手にあるカマス岩をかわすには、ジャイブをする必要があつたのだ。風を左側斜め後ろから受けると、左舷に出した帆の裏側に風が回り込んでワイルドジャイ

ブを起こしやすい。危険この上ない。

ただ風が強くなってきた当時の状況では、ツバメ

号のような一枚帆の縦装ヨットがジャイブすること自体大変危険であった。そこでジョン艇長は、ワイルドジャイブを起こさないギリギリの線でカマス岩の右側をかわそっとしたに違いない。

この賭は結局裏目に出た。

ツバメ号はワイルドジャイブに見舞われる。帆桁

が左舷から右舷に乗組員の頭上を一気に回る。ジョン艇長は直前に警告の叫びをあげた。回転する帆桁に當たれば、頭を割られてしまうか、艇の外にたたき出されてしまふからだ。帆桁の回転によって、反時計回りの巨大なモーメントが舟を支配してしまう。コントロールを失ったツバメ号は船首を左に、カマス岩の方に振られてしまう。

岩に激突した結果、船首に開いた穴から浸水したためにツバメ号は沈んでしまった。木造のヨットなのにツバメ号が浮いていられなかつた理由は、ツバ

メ号がバラスト（船艇に積む重し）を積んでいたためである。

この事故の顛末で感心するのは、ジョン艇長以下おチビちゃんにいたるまで、事故に気落ちしないところだ。全員無事に浜にたどりついて、すぐに皆で難破船の引き上げに奔走し成功する。

感心できないのは救命胴衣を着けていたかったことだ。

それはともかくワイルドジャイブの話は、ヨットを危険なスポーツと見なしかねない。けれども無理をせずに、早め早めの処置をしていけばヨットは決して危険なスポーツではない。ツバメ号の難破の話はこの点を雄弁に物語っている。

風の予想、縮帆の判断、出航の見合わせ、など難破の紙上体験は、よき反面教師である。読者である子どもたちは艇長のジョンの立場になつて、こうした方がよいと判断し処置をくだせるシミュレーションを楽しめる。こんな教材がたくさんあつて、ヨッ

トに乗れる機会も多いというイギリスの子どもは、  
幸せだと思う。

(十文字学園女子短期大学)

## 北の国で風になる

上原 那奈世



この夏休み、北海道の登別温泉で開かれる組合の  
幼稚教育研修会の誘いを受けた途端、不謹慎にも私  
の心は四十代に残したツーリングコース「襟裳岬、  
霧多布」に飛んでいました。

北海道一周の夢は、十数年前からのマイカーによ  
る何回かのドライブの度に少しづつ膨らんでいきま

した。そして、或る年の幼稚園の七夕祭りの折り  
「先生も書いて」と子供達が持つててくれた短冊  
に「四十五歳までに、バイクで北海道一周旅行」と  
書いて「馬鹿だなあ先生死んじやうよ」と担任や子  
供たちに冷やかされたこともありました。

それがどうしてもと思うようになつたのは、ポン  
コツ車で宗谷岬に向かう海岸線を走っている時のこ